



ニオイタチツボスミレ

1、2023年度作業報告－3

1) Q・R地点（旧水田）

Q・R地点は旧水田部分で、土手を復元し水を貯めて湿地に再生したところです。一番下流の旧水田⑥は水路を掘り直して水を引いて常時水がある池（冬水田んぼ）に再生したところです。再生すると、まだ植物が全くない状態でヒメゲンゴロウが出現しました。続いてフラスコモの仲間、コナギ、ミゾソバ等の湿生植物が数多く出現し、水中にはホトケドジョウ・カワムツ等の魚類、モクズガニ、カワナ等 の貝類、ヤゴ・ヒメガムシ・マツモムシ等の水生昆虫が見られるようになりました。また、カワセミやアオサギ、カルガモ等の鳥類等、様々な生物が生息する環境として安定した状態になっています。



Q・R地点作業前（2023年9月20日）



Q・R地点作業後（2024年4月4日）



Q・R地点作業後（旧水田③：4月4日）



Q・R地点作業後（旧水田②：4月4日）

旧水田⑥より上流の⑤は雨が降ってもすぐに水が抜けてやや乾燥した環境ですが、旧水田②・③・④は一部で水が溜まり池状になった部分が出現したところです。植生回復作業直後は植物が無い裸地状態でしたが、すぐにミゾソバが繁茂し作業地の大半を覆うように

なり、水面が見えなくなっていました。

特に旧水田③は水面も広く、アズマヒキガエルが産卵していたところでしたが、ミゾソバが繁茂して水面がほとんど見えなくなっていました。今回の作業で確認すると、水中にはこれまで繁茂していたミゾソバの茎が腐らずに堆積していることが分かりました。そこで、この茎を除去して水面を復元することにしました。前頁上右写真の画面中央右側が復元した水面です。今後は、ミゾソバの茎の除去を継続して行って水面を維持していくつもりです。アズマヒキガエルが安定して産卵できるようになると予想しています。

旧水田②・③は南側の自然歩道沿いがやや高くなっていますが、この部分は除草して日照を確保して、湿生植物等の弱い植物の発芽を促進するようにしています。

2) M・P地点

M・P地点は森だったところの木を伐採・伐根したところですが、礫が目立つ裸地になり植物の進出が遅かったために、ハルリンドウの自生地点に連続する部分で刈り取ったイヌノハナヒゲをそのまま現地に残す実験を2年連続して行いました。残したイヌノハナヒゲはやや灰色になって地表面に張り付くようになっており、地表面が保水されて予想通りハルリンドウが進出しました。今年も、進出した部分の個体数が大きく増えました。ハルリンドウは4月中旬に開花のピークを迎え、4月12日の開花数は11,161輪で、過去最高になっています。



M地点作業前 (2023年9月20日)

P地点作業後 (2024年4月4日)



M地点ハルリンドウ進出状況 (画面中央に帯状に広がっている。2024年4月4日)

3) K地点

K地点はウメバチソウが残っていたところですが、去年は開花しませんでした。ウメバチソウはとうとう、葦毛湿原では地上絶滅してしまい、去年の開花はゼロでした。そこで、ウメバチソウの復活を期待して植生回復作業を行いました。

下写真左が作業前の状況で、画面中央にあるコシダの小群落の裏側でウメバチソウが開花していました。今回の作業では、コシダを刈り取り、根を除去しましたが、根についている土の中にはウメバチソウの種子が残っている可能性があるため、根をそのまま現地に仮積みして残してあります（下写真右）。なんとか復活してほしいと期待しています。



K地点作業前（2023年9月20日）



K地点作業後（2024年4月4日）

4) 2023年度作業のまとめ

2023年度はH地点西側の指定地外の**ミカフシオガマ復活**のための木の伐採、A地点の**ヒメミカキグサの保全**のための実験地の設置、I・N地点の**ホソバインドウの保全**のための実験地の設置、K地点の**ウメバチソウ復活**のための作業が中心になりました。これらの作業は特定の種を対象にした復活・保全作業になります。

このほかにも、O地点で裸地を維持するためのイヌノハナヒゲの根の除去、Q・R地点での開水面確保のための水中に溜まったミゾソバの茎の除去を行いました。また、L地点では2022年度にバックホーでネザサの根を除去した際に仮置きしたネザサの山を処理しました。根だけを除去して埋土種子の入った土を残し、大きな礫が溜まっている部分に土を撒き出しました。埋土種子から様々な植物が発芽すると期待しています。

2. ニホンミツバチ(在来種)の巣箱設置

葦毛湿原では、植物の受粉を進めることを目的にニホンミツバチの巣箱を2023年3月に3か所設置し、その結果は前号（葦毛通信 No. 151）で紹介しました。また、巣箱が大きすぎ、数が足りないという指摘があり、2024年3月には、より簡略化して2/3ほどに小型化した巣箱を一の沢から三の沢に11個新たに設置しました。

2023年3月に設置した巣箱のうち、昨年入ったものとは別の巣箱にニホンミツバチが入っているのを4月22日に確認しました。4月の分蜂の時期に入ったもので、多くのハチが盛んに出入りしています。

1) 2024年の巣箱設置

2024年3月4日に設置した巣箱は、縦型と横型の2種類です。縦型は縦・横204mm、高さ260mm、横型は縦・横284mm、高さ180mmで、蜂蜜を採取するのが目的ではないため、天井板はビス止めしてあります。巣箱はコンクリートブロックの上に底板を敷いてその上

に置いて、屋根にはトタンを乗せて雨除けにしています。

巣箱は一の沢湿地に5個、二の沢湿地に4個、三の沢湿地に2個、合計11個設置しました。2023年にはT・Y・W地点の3か所に3個設置したので、葦毛湿原には2年合計で14個の巣箱を設置してあります。



縦型巣箱（2024年4月4日）



横型巣箱（2024年4月4日）

2) キンリョウヘン（ラン科シュンラン属）

ニホンミツバチの巣箱設置にあたって、ニホンミツバチの養蜂を行っている方から助言をしてもらいました。その中で、ニホンミツバチの誘引にはキンリョウヘン（金稜辺）を置くと良いという助言がありましたが、キンリョウヘンは中国原産のランで外来種です。また、日本に渡来したのは江戸時代以前で、園芸種の交配に使われて多くの品種が作られているようです。

葦毛湿原では、外来種の持ち込みを禁止しているので利用していませんが、キンリョウヘンの成分を配合したとされる誘引剤は使用しています。葦毛湿原では、今後もできる限り影響の少ない方法でニホンミツバチの定着を促進していくつもりです。ニホンミツバチ導入とその成果が分かるには、もう少し時間がかかると思われます。

3、葦毛湿原春の観察会

葦毛春の観察会を開催します。今回から事前申込不要で、現地で当日受付けを行います。葦毛湿原では、ミカワバイケイソウやカザグルマ等の春後半の花が咲いています。観察会では、葦毛湿原や周辺の自然環境について説明します。植生回復作業で再生した湿原をぜひご覧ください。

葦毛湿原春の観察会

- 1 開催日時 5月11日（土）9:30～11:30
- 2 集合場所 長尾池公園あずまや（トイレ東側）
- 3 参加申込 現地受付（事前申し込み不要）、定員60名（申込先着順）
- 4 問い合わせ 豊橋市文化財センター（☎0532-56-6060）